

Y3-13

「君の名は（安全は名前から）」運動の
定着度と患者安心感の実態調査

諏訪赤十字病院 医療安全推進室

○今井 美雪、山村 伸吉、跡部 治、
森林 美恵、矢部 茂美、藤森 和樹、
長田 年生、宮川 直之

【はじめに】当院はH19年11月より患者に名乗ってもらう「君の名は」運動を展開してきた。H20年5月医療安全全国共同行動がキックオフされ、行動目標8安全は名前からに登録したのを機会に、それまで取り組んできた「君の名は」運動の定着度と患者安心感の実態調査を行った。今回、その結果と今後の課題を報告する。

【方法】外来患者は、診察時及び注射・点滴・採血時、X線・心電図・内視鏡検査時に「名前を名乗る方法で確認されたか」「名前確認時の安心感」等の聞き取り調査を行った。入院患者は、「入院時オリエンテーション時名乗ることの説明を受けたか」「注射・点滴・採血時、X線・心電図・内視鏡検査時に名乗る方法で確認されたか」「名前確認時の安心感」等のアンケート調査を行った。

【結果と考察】外来部門では、過半数が「名乗る以外の方法（外来受付票）」で名前確認されていた。検査技師より看護師にその傾向が強かった。また37.6%が名前を確認されることで安心感を得ていた。長期通院患者では医療従事者と信頼関係ができており「名前を名乗る」「名乗ってもらう」ことに互いに抵抗があることが予測された。病棟部門では、約90%の患者に入院時「名前を名乗ってもらう」を説明され、約80%の患者に実施されていた。検査場面では、50～70%の患者に「名前を名乗ってもらう」が行われていた。毎回名前を確認されることで84%の患者が安心感を得ていた。

【今後の課題】入院患者に比べて外来患者の「名前確認」が十分定着しておらず、患者への周知の機会及び医療者側への働きかけをさらに推進する必要がある。また、医療者から患者へのアプローチを増やすことが「名前確認」の患者教育につながると考える。

Y3-14

救急外来受付時の事務が行うトリアージ（危険予知シミュレーションより）

高山赤十字病院 事務部 医事課

○大西 一彦

当院の救急外来を訪れる患者数は、1年間に約15,000名（1日平均40名）おり、うち、救急車にて搬送される患者は全体の17%（約2,500名）となっています。その17%の患者中、入院となる患者は、約1,100名で、救急車搬送された全患者数の44%という結果でした。一方で83%（約12,500名）の患者は、自身（ご家族の付添い搬送）で救急外来に来院しており、うち、入院となる患者は約1,100名で、実に10人に1人弱の割合で入院となる結果でした。要するに、救急外来の全受付患者数のうち、入院（若しくは死亡）される患者は、15%（年間約2,200名）で、その来院方法は、救急車搬送と、自身での来院（ウォーク・イン）患者とがちょうど半々という結果でした。この結果から、当院の救急外来に、いかに多くの軽症患者が訪れているかを物語っている反面、83%を占める自身での来院（ウォーク・イン）患者の中に、救命救急センター入院や24時間以内に死亡される非常に重篤な症状の患者が潜在していることを意味しています。そこで、救急外来受診者の大半を占める、ウォーク・イン患者の中に重篤な症状を呈している方が潜在し、受付にあたる事務職員が、その初期トリアージを行っている現状と対応について再考し、救急処置室内にいる医師、看護師との連携をスムーズに行うことにより、危険の予知と防止を目的に危険予知シミュレーションを行ったことから報告します。